The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代日本における学校制服文化の形成に関する考察 : 学校制服論試論
Author(s)	難波, 知子
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 170-171
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52821
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近代日本における学校制服文化の形成に関する考察
── 学校制服論試論 ──

難波知子／お茶の水女子大学大学院博士後期課程

1　はじめに

現在の女子高校生にとって，学校制服はおしゃれでかわいいものとして関心を集める対象である。近年の「なんちゃって制服」と呼ばれる，私服に制服風ファッションを取り入れる流行は，それぞれの「個性」を表現するために，他校の制服や鞄，市販品のリボンやスカートなどを組み合わせて着用する。どこの学校を表わすものでもない，「私」を表わすファッションである。

本研究は，こうした制服の定義（定められた服装）を超え出る現象や意味解釈を含めて，いかに学校制服を論じられるか，そのアプローチを模索し，学校制服とは何かを再考することを目的とする。学校制服のあり様をより深く理解するために，学校制服を教育の文脈だけではなく，広く文化として捉え直し，文化としての学校制服を論じる方法論を学校制服の歴史的な形成過程の検討から模索する。本発表では明治から昭和戦前期を対象とし，学校・着用者・生産者の三つの視点から学校制服の実践を振り返り跡づける。

2　学校制服総論

学校制服と一口にいっても様々あり，性別，教育機関の種類，地域や時代によって，着る主体，制服のデザイン，費用，材料，製作方法等は変わってくる。こうした多様に展開する学校制服の実践を捉えるために，これらの制服に共通する「学校」・「着用者」・「生産者」の視点を設定し，どのような関係性によって学校制服が形成されてきたかをみていく方法論を提示する。本研究の特色は学校と着用者の関係に加えて，モノとしての制服をつくる生産者の視点を加えるところにある。この生産者の視点は先行研究ではほとんど取り上げられてこなかったが，明治期から昭和戦前期は和服から洋服へ，さらには家庭裁縫から既製服へと衣生活が大きな変化を迎える時期にあたり，制服の着用は，洋服の製作・入手・着用という新たな文化の受容の側面をもつ。とりわけ制服を既製服として生産した衣服産業の発達は，安価な既製の制服を全国へ普及させる役割を果たしたと思われる。また，生産者は単に制服を生産しただけではなく，積極的に制服の制定に関与してきた。例えば，東京洋服商工同業組合は，明治15（1882）年頃に文部省へ官立学校での制服制定を請願している。洋服店にとって学校単位で受注される学校制服は，一定規模の安定した利益を生む商品である。学校の制服制定の背後に，洋服店の営業活動という教育界とは別の推進力が潜んでいた可能性がある。以上のように生産者の視点は，制服が実際にどのように製作，入手，着用されたかを明らかにするとともに，学校と着用者の関係に収まりきらない制服の実践の側面を示してくれる。

こうした学校制服の実践を歴史的に振り返るにあたり，本発表では学校沿革史を主な資料として取り上げる。その他に制服の実物資料，制服関連企業の社史，制服関連組合の沿革史，統計資料，生産地の郷土資料を用いる。

3　学校制服各論

次に総論で示した学校・着用者・生産者の視点を用いて，具体的な事例をみていく。

(1) **帝国大学**　帝国大学の事例では，制服の製作・入手がいかに制定されたかをみる。

帝国大学は明治19（1886）年に官立の高等教育機関として創設され，同年制服も制定された。帝国大学の制服はごく一部のエリートが着用した男子の制服であり，注目すべきはこれが自費支弁によって制定されたことである。規定では制服を調製する裁縫店が指定され，制服の注文や支払いは大学及び文部省が一括管理する制度となっている。その一方で，制服の品質の選択や月賦払いなど，自費支弁する学生への配慮も窺える。このように制服規定からは制服の調製方法を知ることができ，帝国大学の場合には，大学が裁縫店を指定するかたちで現実の制度が機能していた。

(2) **高等女学校**　次に女子の中等教育機関として明治32（1899）年に制度化された高等女学校の制服を中心にみていく。

高等女学校の制服は，明治30年代に普及する袴から大正末になると洋服，セーラー服へと移行していく大きな流れがあり，男子と特に異なるのが，洋服の制服を学校の裁縫教育の一環として女学生自身が製作したことである。これは制服の着用者と生産者が一致する事例である。またその変化形として，学校の上級生が新入生の制服を製作するという学校も多くあった。この上級生による制服製作は，上級生にとっては裁縫技術の習得・向上，新入生及び保護者には経費節減，学校にとっては上級生と下級生の連帯感の育成など，様々な目的や効果を含んで実施された。さらに，洋服がまだ一般的に普及していなかった時代に，洋服の制服を仕立て着用することは試行錯誤の連続であったと思われ，そのような状況下で高等女学校の生徒は自らの手で制服をつくり着用するという洋服文化の受容，咀嚼の先頭に立った存在であったといえる。このように制服製作に注目することによって，学校制服が様々な意味や価値を伴いながら，女子の場合には洋服文化の窓口となった側面が見出せる。

(3) **小学校**　公立小学校はあらゆる生活水準の家庭の児童が就学することから，一定の服装を規定することがなかったにも関わらず，昭和前期頃には卒業写真に写る児童（男子）のほとんどが学生服を着用するようになる。卒業写真はハレの装いであり，必ずしも日常生活を反映しない部分があるが，全国へ同じ型の学生服が普及したことを示すものと思われる。この普及の背景には，既製服として制服が大量生産されたことが考えられる。戦前に小学生向けの男子の学生服を生産した地域に岡山県倉敷市児島がある。児島で生産された学生服は，当地特産の小倉織や霜降りと呼ばれる厚地の綿織物が使用され，学生服の縫製技術はそれ以前の足袋の技術が応用された。この綿製の学生服は，ウールのものと比べて安価に販売され，全国へ出荷された。このように全国の小学生へ制服が普及するには制服産業の対応を追うことが不可欠である。

4　おわりに

本発表では，学校・着用者・生産者の三つの視点から制服の実践をみる方法論を提示し，男子・女子・小学生（男子）の具体的な事例を検討した。とりわけ生産者の視点を加えることによって，制服がどのように製作され，入手されたかを明らかにするとともに，洋服文化の受容，咀嚼といった学校と着用者の関係に収まらないより広い文脈や時代背景のなかで，学校制服に付与される多様な意味や価値づけを捉えることができたと思われる。